

第1回 ライトノベル作法研究所主催 大夏祭り大会 選評評価シート

作品名: 「泣くときは水の中だと決めていたのに」

テーマ: 「本当は分かっているのに、死を受け入れたくない美少女」

キャラクター

70

ストーリー

65

テーマ(設定)

74

文章力

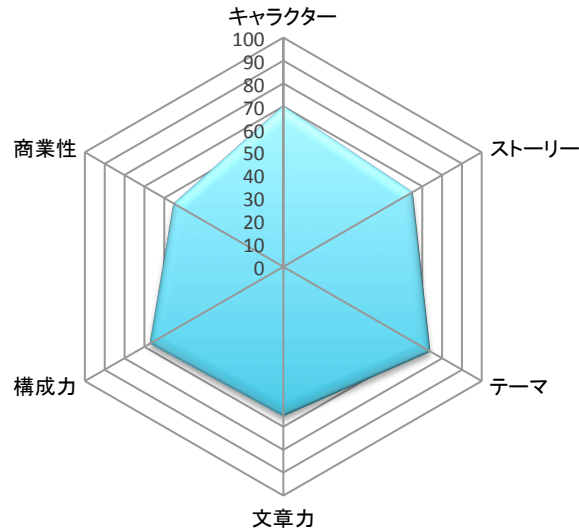
65

構成力

67

商業性

55



・細かい点

△ 涼子ちゃんが入院している新棟は～→涼子(りょうこ)ちゃんが入院している新棟は～ ちなみに最初で清川涼子ちゃんと言っておいた方が後々分かりやすくなる感じる。

○ バラと涼子を重ねた上での描写が読んでいて非常に赴き深かった。赤いバラが一本痛んできている意味やドライフラワーとなってしまっている意味を詳しくは説明せず、それが涼子のどのような心境を比喩的に表しているのか読んでいる側に想像の余地が残される点が良い。

× 作品投稿期間を過ぎたことによる点数上のペナルティ (-10×遅延分数)

・総評

会話や描写に使う文字量が所々過多であるため、削った方が文字数の節約にもなり、かつ小説っぽくなると思われる。例えば「従姉妹なんです。だから似てるのでしょうね」といった発言も、その前に「似てるわねえ」という言葉があるので、「従姉妹なんです」に変えるだけで野暮ったさを除ける。

世界観について、作品全体から水の中のようなゆらゆらとして気持ちのよい空気が伝わって来た。今回の作品テーマの一つにプールというワードがあるだけに、そのテーマを設定に留まらず文体で表現できている点は非常に面白い。一定のリズムでゆらゆらしているあまり「山場がない」「オチがない」といった批判が寄せられるかもしれないが、このゆらゆらとした感じは作者様にしか表現し得ないニュアンスでありこの感覚を楽しみたい読み手もいるはずであるので、むしろこの点は作品の長所として認識した方が良いように思われる。

強いて批判すべき点をあげると、動作の描写(AはBする、AはBしている等)と、情報の提示(AをBと感じる、AはBである等)の割合に関して、情報の提示が多い傾向にある。例えば「ざぶんと水に飛び込んだ瞬間から～」から「～を許せるから泣けるのかもしれない」はほぼ情報の提示。さすがに多過ぎるため、もう少し動作の描写で登場人物の心情などを表現できているとなお表現に多彩性が生まれ面白くなると思われる。

合計減点ポイント: -10

総得点: 396 / 600

B方式総合得点: 25136 点